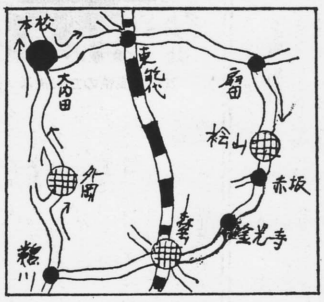
校友時報

昭和47年9月29日
編集人兼発行所
秋田県能代市辻分町14番26号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所 大勝堂印刷所

夜空をながめ40キロ
―十里強歩終わる―

完歩を目ざした四十キロ
距離少しのびる

去る九月十四日早前〇時より、恒例の十里強歩が行なわれた。今回は再開されて三度目のものであるが、これまでにない好天に恵まれた。コースが昨年に比べ、少し長くなったこともあり、門限の午前八前までに到着しない人があわれた。また、完歩を目ざしたことも合わせて、非常に多くの問題を残した十里強歩であった。



十里強歩のコース
本校→大内田→東能代→扇田→檜山→金光寺→森岳→鶴川→羽立→外岡→相染森→大内田→本校　（太字は関門を示す）

九月十四日、再開されて三度目の十里強歩が行なわれた。前回もその前も、天候の点であまりかんばしくなかったが、今回は無数の星が輝く好天に恵まれた。

0時数分前、最初のクラスの三Aが先頭となって出発し、クラスごとに間をおいて出発した。前回とはちがい今回は体育館より出発した。最初のクラスが出発してから、最後のクラスが出発するまで差は約三十分。

学校を出て大内田まではアスファルト、そこから東能代まではジャリ道が多く、道地までは国道を通った。そこから檜山へぬけ、アスファルトやジャリ道を上り下りして金岡を通り中間地点の森岳まで進んだ。女子はここがゴール。

男子はまた、ゴールで校舎を目ざして、歩き出した。森岳から鶴川を通り、昨年とは違う外岡を通って、相染森、再度大内田を経由して学校へ到着した。これで四十余キロ完歩したのである。

今年は完歩を目標としたためか男子は締め切り時間を過ぎた、八時三十分以後であった。また、女子は、四時前に全員到着した。

一人一人に聞いてみると、「疲れた。もう二度とやりたくない。」という声が多く聞かれた。「四十キロとはこんなに長かったのか。」という一年生の声もあった。二、三年生の中には「前年よりも疲れた。」というのと、「全コース歩き通したのでそうは疲れなかった。」というのがあった。「また来年もやりたい。」という言葉も少なからず聞かれた。去年から女子の中には「このまま学校まで行きたい。」という声が聞かれたが、半分の二十キロの距離を考えれば、当然であろうか。

途中には、自転車に乗せてもらったり、タバコをすって見つかり、罰を受けた者がいたことが残念である。それとは逆って、道の真中にかたまって横になっている者や、道ばたでいく人かたまって話をしている人たちもいた。闇の中で夜空に向かって「オトウサーン」とか「バカヤロー」などと日頃のうっぷんを晴らすような奇声を出していた者もいた。道の途中で生徒役員改選の選挙演説をしている者もいた。それらの人たちも、その人たちなりに自己主張を行ない、楽しい思い出として残るだろう。

森岳関門で記念（?）撮影

走るのはだれか？
生徒の声を聞いて欲しい

一見、然と行なわれたような十里強歩であったが、かなり多くの問題点を残したようだ。

この行事は一応学校側の主催だが、歩くのは生徒なのだから、その意見を少しでも聞いてほしかったと思う。

まず、スタートの時点において最初に出発した3Aと最後に出発したIGとの時間差が三十分ほどあった。その間に歩いて2～3キロ、走れば6～7キロも差がつくのである。したがないと言ってはそれまでだが……。

次に、これは原則として走ってはいけないということになっていたが、はたしてそれを完全に守った人は何人いるだろうか。そして全コースを歩き通し、8時以後につき先生方に怒られそのとばっちりをされた人がいるとか――。

しかし、全コースを完全に歩いて、7時前についた人がいることも事実である。

だが、十里強歩の真の目的は全コースを歩き通す精神力と忍耐力をつけるということのはずである。それなのに時間に遅れたからといって怒ったりばかにしたりすることは少し考えものである。遅れた人を怒るよりは、むしろ早く来た人を怒るべきだと思う。これらの人が走ってはいけないという注意を破ったことは明らかなのだから。

そして旗をかかげた人がいたのだが、その人は出発直前にそれを取り上げられたそうだ。なぜ取り上げる必要があったのだろうか。

それらの問題をこれからう改めていくのが期待される。つまり、十里強歩にまでいろいろな制約をつけるということはそういうものかということである。もちろん一般の人に迷惑をかけないという基本的な制約は必要である。

しかし、それ以外は我々を信用して（できないという先生もいるかもしれないが）欲しい。これからも十里強歩は続くと思う。それにつれて問題もつぎつぎと出てくると思うが、そんな時は常に生徒と話し合うようにしてもらいたい。

ちょっと一休み（東能代にて）

祝 学校長、文部大臣賞受賞

本校校長和田勝太郎先生は、十月五日、国立劇場で行なわれる学制百年記念式典において、教育功労者として、文部大臣から表彰されることになり、御夫人同伴で出席されることになりました。

なお、本県高校関係では大曲農高の校長と二人だけとのこと。

学生のみせ
キムラヤ
畠町
2―5535

部説
公害に思う

近ごろ、判決が下って、終止符の打たれた公害裁判があったことは承知のことであり、結果は原告側の勝利に終った。

しかし、公害は終ったわけではない。我々が公害裁判で、まず考えなければならないことは、人間の行なった、自然に対する犯罪に対して、人間が、人間を裁くということであろう。

我々人間は、科学の発達ということで、一生懸命、楽をすることばかりを考え続けてきたのではなかろうか。そしてまた、いらなくなったものは排出し、そのまま捨てておくといった動物の本能の域を出ない無責任な感覚が、この公害を引き起こしたのではあるまいか。

原始時代には自然のように、いらなくなった食べ殻などは捨ててPCBやカドミウム、有機水銀などという自然界に有害な物質にたったことに気づかなかったためではなかろうか。人間が自分自身を甘やかし、そして、自然の法則を無視し、破壊してきた果てが、こうめたさのようなものを感じると思う。田子の浦の工場の場合もそうであろう。あれだけのきれいであったという自然であるから、そういうしめたさを感じたと思う。そうした感覚が資本家によって破壊されて以来、それがあたりまえのようなことになって積み重なってきたのである。

らなくなったものは排出し、そのまま捨てておくといった動物の本能の域を出ない無責任な感覚が、この公害を引き起こしたのではあるまいか。

原始時代には自然のように、いらなくなったものは排出し、そのまま捨てておくといった動物の本能の域を出ない無責任な感覚が、この公害を引き起こしたのではあるまいか。

我々人間は、科学の発達ということで、一生懸命、楽をすることばかりを考え続けてきたのではなかろうか。そしてまた、いらなくなったものは排出し、そのまま捨てておくといった動物の本能の域を出ない無責任な感覚が、この公害を引き起こしたのではあるまいか。

原始時代には自然のように、いらなくなったものは排出し、そのまま捨てておくといった動物の本能の域を出ない無責任な感覚が、この公害を引き起こしたのではあるまいか。

PCBやカドミウム、有機水銀などという自然界に有害な物質にたったことに気づかなかったためではなかろうか。人間が自分自身を甘やかし、そして、自然の法則を無視し、破壊してきた果てが、こうめたさのようなものを感じると思う。田子の浦の工場の場合もそうであろう。あれだけのきれいであったという自然であるから、そういうしめたさを感じたと思う。そうした感覚が資本家によって破壊されて以来、それがあたりまえのようなことになって積み重なってきたのである。

に積もるはずである。そして足にまつわりつき、じゃまになってきた時が、田子の浦のような所では公害ということになるのである。

掃除をしているかぎりのではなくゴミを捨てることに問題があるのである。最初だれでも、ゴミをちらかすことに対しては、うしろめたさを感じたと思う。そうした感覚が資本家によって破壊されて以来、それがあたりまえのようなことになって積み重なってきたのである。

要は、うしろめたさを感じるうちに、一人一人が気をつければよいのである。おそらくだれが見ても、ゴミの散っている所を見て、美しいと思う者はいないはずである。たったひとつのゴミだとか、自分が散らかしたものではないと言う前に、まず自分の目の前のゴミ箱にゴミを捨てることができないだろうか。そうすれば、校内でもほかの所でも少しはきれいになるのである。人間が人間として行なったことに対して、人間として対処しなければならないのであるまいか。この原則を忘れては、公害の絶滅は期待できないと思う。まず原則をわきまえよう。

白・黒カラーのDPE
カメラの修理
西巻写真工房
中和通り T②―0068

スポーツの秋!!
スポーツ用品で
体力増進を
秋林運動具店
北高通り TEL 2―3257

日々の健康管理に
のと薬局
中和通り TEL 2―3919

能代ボウル
ゴールドレーン　シルバーレーン
能代市元町14番6号　能代市寿城長根37番地の1
電話（01855）2―0154㈹　電話（01855）2―1175㈹

メガネの カモヤ
畠町 T2―3740

論点

▼前号で地球環境の悪化に触れたが、我々の身近な環境について考えてみたい。▼我々は能代高校という学校の中で一つの集団を形成している一員である。個々人は異質な精神と肉体をもち、学校を形成している。この集団は規則によって統制されている。我々の生活は、規則によって維持されている。我々にとって規則は生活の一部分であり、全体をささえているのかもしれない。なければ生きてゆくのに極めて不都合なるであろう。その規制が、その現状に一致しているなら問題はない。▼しかし現在の規則の中にも、現状にそぐわないものがある。人間は、自分たちに合うように環境を作り、変えてきた。結果よりよしにかかわらず、とにかく変えてきた。現状に合ってはいるけれども、時代が変わると、当然変わらなければならない事が出てくるのである。▼現状とか環境を知ることは、旧来の規則を変えるのに、絶対必要である。我々には、この自分の環境と自分自身を知ってない者が意外と多いのである。それは我々が、それを知ろうとしなかったり、見えなかったりするからである。我々の世界は、相反し複雑なものから成り立っている。その全容を見渡すことは、非常に困難である。これは我々が不完全で未熟な知識と目しか持っていないことを裏づけていると思う。それだから、我々の目前にある解答を除くことができないのである。▼物事を正視し、その内容をとらえることは、窓から外の世界をのぞくようなことではできない。その壁を貫いて見通すことができない限り見えないわけである。我々は無知であることを自覚しなければならない。